



学部で経済史をどう教えるか

社会経済史学会第88回全国大会ラウンドテーブル
2019年5月18日(土)11:00-12:30 青山学院大学
小野塚 知二(東京大学・経済学研究科)

はじめに:「学部で経済史」の意味の限定

経済・経営系学部前期課程での「基礎経済史」・「一般経済史」など、必修性の高い科目(権力機構としての大学で否応なく学ばせられる科目)に対して、学生の関心を引き出しうる(権威を調達できる)なら、一般読者や好奇心溢れる高校生にも喜んで読んでもらえる。

多くの衆生を済度する大乘仏教的経済史。Cf.目覚めた少数者のための上座部仏教的経済史(学部後期の選択科目、大学院)

I 執筆時にとくに考慮したこと

1. 産業革命からではなく、それ以前(前近代・近世)も叙述する。

(1) 近現代とは異なる経済のあり方と倫理・思想を知ること、「いま」を相対化する。

(2) 近現代の経済の持続可能性(サステナビリティ)。

① **自然的条件(原料革命の持続不可能性)**：『石炭問題』(化石燃料の有限性, W.S. Jevons, 1865)は、**エネルギー革命**という意味では、すでに現時点で原理的には解決可能である=熱機関・火力発電・原子力発電は、水力・風力・太陽光・潮汐・地熱など再生可能エネルギーで代替できる。Cf. おそらく唯一の例外としての大型・長距離航空輸送。

原料革命(a 土木・建築・造船・機械の主原料が木材から鉄材に変化、 b 製鉄原料(還元剤)が木炭から石炭に変化、 c 農業原料が、緑肥・糞尿から化石燃料由来の合成肥料と化学農薬に変化)という意味では、化石燃料依存から卒業できる見通しは、まだ(おそらく原理的な理由ゆえに)立っていない。

近現代の産業文明は、この原料革命という点で、自然的限界(≡森林資源)の一時的突破に過ぎないことは、前近代(に滅亡した文明)との比較・対照において、明瞭になる。

② **人間的条件**： 際限なく欲望し続け、それを社会的に充足し続ける人間・社会をどこまで維持できるか？ ⇒ 産業革命以前(殊に近世)との比較の重要性。

I 執筆時にとくに考慮したこと

2. できるだけ統一した論理で前近代から現在にいたる経済の変化の過程を説明することを試みる。

(1) **経済成長の原動力**としての「**際限のない欲望**」=外的に物象化された「**資本(主義)**」概念からの解放(経済学の「魔術からの解放(Entzauberung, exorcism)」。「資本」とは、「魔術(Magie)」の言葉だから、それをを用いている限り、資本や資本主義を万人が統御可能な状態に飼い馴らすことはできない。

(2) **前近代社会の持続可能性**(富の規範、収奪された富の非生産的用法、民衆的剰余の非生産的用法(祭礼・ポトラッチなどの蕩尽))

(3) **近世に発生した変化の特異性**：欲望解放と、人格・自由・人権・個人の生成と、産業革命の同時性(Cf.封建制的・身分制的・共同体的な資本主義の可能性)。

3. 経済学、歴史学、人文社会科学諸分野の諸概念をできる限り平易に、統一した観点から定義する。

殊に、市場・商品・貨幣の超歴史性と、市場経済、資本主義の定義とその生成条件の確定と反省。

Ⅱ 学部(前期)で経済史をどのように教えるか

1. 経済理論と補完的な経済史

無限の時空間を前提とせず、有限で個別的な時間・空間の中に成立してきた現実の経済・社会・人間を、個性的かつ理論的に整序する学問＝**経済学の基礎分野としての経済史**。経済理論の単なる応用問題ではない経済史。

2. 近現代の市場経済・資本主義・産業社会・市民社会を絶対化しない(が、夢を安易に語ることもしない)。

それらを「千年王国」・到達点とはみないのは、思想の問題ではなく、科学の問題。永遠不滅のなにごとかを想定する方が、特定の価値観に依存した判断であり、非科学的となる危険性を免れない。

3. 経済学以外の学問諸分野への架橋・展望

経済学だけでなく、人文社会科学の諸分野、さらには自然科学(生命科学・物質科学)への架橋・展望。経済学において、**経済学以外に開かれた、最も大きく、風通しの良い窓の役割を経済史が果たす。**